



行動展開表現の日本語・中国語・韓国語・英語の対照研究

楊, 吟

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2013-09-25

(Date of Publication)

2014-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第5920号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005920>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

行動展開表現の日本語・中国語・韓国語・英語の対照研究

氏名：楊吟

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 鈴木 義和 教授
(副) 松本 曜 教授
(副) 高梨 信乃 准教授

<要旨>

相手あるいは自分（またはその両者）が何らかの行動を起こすことを表現意図とする表現は坂本ほか（1994）によって、「行動展開表現」と呼ばれている。本稿は、その代表的な〔依頼〕、〔勧め・助言〕、〔誘い〕、〔申し出〕を取り上げて、日本語・中国語・韓国語・英語の表現形式を対照させることで、それぞれの言語の特徴を検討する研究である。

行動展開表現は「行動（だれが行動するのか）、決定権（だれがその行動の決定権を持っているのか）、利益（その行動の結果、だれが利益・恩恵を受けるのか）」という3つの要素で分類されている。行動に関して、〔依頼〕と〔勧め・助言〕の行動者は聞き手であり、〔誘い〕の行動者は話し手と聞き手であり、〔申し出〕の行動者は話し手である。決定権に関して、みな全体として聞き手の決定権が強いカテゴリである。しかし、実際使われる表現形式によって「聞き手の決定権／話し手の強制力」の強弱の幅があることを指摘した。利益に関して、〔依頼〕の利益は話し手側にあり、〔勧め・助言〕と〔申し出〕の利益は聞き手側にある。〔申し出〕の利益は話し手と聞き手の両方にあるのは典型的であるが、話し手に傾く場合も聞き手に傾く場合もあることを指摘した。

また、行動展開表現の全体像を解明するために、本稿は表現意図から表現形式を見ることと、表現形式から表現意図を見ることの2つの方向を提案した。こう見ることによって、表現意図と表現形式の多対多な関係、そして形式から見る行動展開表現の相互関係を明らかにした。

日本語・中国語・韓国語・英語の違いに関して、表現意図から表現形式を見た際も、表現形式から表現意図を見た際も、その違いは各か一概の傾向性と

各章の概要は次のとおりである。

第1章では、本稿の立場を述べた。まず、なぜこの研究テーマにしたかを研究背景で述べた。次に、先行研究を概観し、なぜ坂本ほか（1994）、蒲谷ほか（2009）の行動展開表現を本稿の理論的大枠として用いたかを述べた。最後に、本稿の目的と研究方法について述べた。

第2章では、行動展開表現の一つである〔依頼〕表現を取り上げ、日本語・中国語・韓国語・英語の表現形式のバリエーションをまとめたうえで、話し手の強制力の強弱と利益・恩恵の角度から、比較考察を行った。

〔依頼〕の表現意図を表しうる表現形式は、《依頼宣言》、《願望表出》、《感情表出》、《思考表出》、《命令指示》、《依頼》、《直接依頼》、《可能質問》、《意志質問》、《依頼可能質問》という表現タイプに分けられる。

〔依頼〕表現は全体として話し手の強制力が弱く、聞き手の決定権が強いが、実際使われる表現形式は話し手の強制力の強弱の程度がさまざまある。《依頼宣言》、《命令指示》、《依頼》、《直接依頼》を話し手の強制力が強めな表現タイプとし、そのほかを話し手の強制力が弱めな表現タイプとすることができる。日本語の小説の用例とその中国語・韓国語・英

(注) 4, 000字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

語訳を比べると、英語では話し手の強制力が弱めな表現タイプが多く使われるのに対して、中国語と韓国語話し手の強制力が強めな表現タイプが多く使われ、日本語はその中間に位置するという傾向が分かった。

〔依頼〕の利益・恩恵が自分にあるので、自分が利益・恩恵を受けることを表す表現形式が使われる場合がある。ほかの言語と比べて、日本語は授受表現が含まれる表現形式を多用するということが大きな特徴である。一方、中国語・韓国語・英語は日本語ほど自分が利益・恩恵を受けることを表す表現形式が使われない。《命令指示》タイプのような自分が利益・恩恵を受けることを表さない表現形式でも〔依頼〕の表現意図を表しうる、ということが特徴的である。

第3章では、行動展開表現の一つである〔勧め・助言〕表現を取り上げ、日本語・中国語・英語・韓国語の形式バリエーションをまとめたうえで、話し手の強制力の強弱の観点から、各言語においてどのような表現タイプがよく使われるかを考察した。

〔勧め・助言〕表現は《勧め宣言》、《仮定》、《比較評価》、《肯定評価》、《許可》、《義務》、《意志表明》、《命令指示》、《依頼》、《直接勧め》、《行為質問》、《願望質問》、《意見質問》という表現タイプに分けられる。

これらの表現タイプのうち、《義務》、《意志表明》、《命令指示》、《依頼》、《直接勧め》を話し手の強制力が強めな形式とし、そのほかを話し手の強制力が弱めな表現タイプとすることができる。形式のバリエーションから見ると、日本語においては話し手の強制力が強めな表現タイプが多い。それにもかかわらず、日本語の小説における用例とその訳を比べると、実際には、日本語では話し手の強制力が弱めな表現タイプが比較的多く使われているのに対し、韓国語・英語・中国語は話し手の強制力が強めな表現タイプが比較的多く使われているという結果を得た。

第4章では、行動展開表現の一つである〔誘い〕表現を取り上げ、日本語・中国語・英語・韓国語における表現形式のバリエーションをまとめた。そして、それぞれの形式が「グループ型」あるいは「引き込み型」の〔誘い〕に使われるかどうか、各言語でよく使われるのは意志から拡張した形式か勧めから拡張した形式か、を考察した。また、典型的な〔誘い〕表現とそうでない表現、〔誘い〕表現が用いられる場合とそうでない場合があることを確認した。

同じ形式が「グループ型」の〔誘い〕にも「引き込み型」の〔誘い〕に使われることがあるが、日本語・中国語・韓国語・英語のうち、韓国語の表現形式はもっとも汎用的であり、英語の表現形式が一番使い分けている。

〔誘い〕表現は《意志表明》、《命令指示》、《意志確認質問》、《行為質問》、《願望質問》、《意見質問》という表現タイプに分けられるが、《意志表明》、《命令指示》、《意志確認質問》は意志表現から拡張した表現タイプで、《行為質問》、《願望質問》、《意見質問》は勧め表現から拡張した表現タイプであると考えられる。日本語の小説における用例とその中国語・韓国語・英語訳を比べると、日本語・中国語・韓国語では意志から拡張した表現タイプが比較

的によく使われるのに対して、英語では勧めから拡張した表現タイプが比較的よく使われる。

典型的な〔誘い〕表現は、自分と相手が一緒に行動し、利益が両方にあつて、行動の決定権が相手にあるような場合であると考えられるが、それ以外に、「習慣的〔誘い〕」、「懇願的〔誘い〕」、「了承的〔誘い〕」表現も存在する。

〔誘い〕表現が避けられる場合というのは、日本語では目上の人を誘う場合や司会者が会議を始めるときの慣用表現などが挙げられる。

第5章では、行動展開表現の一つである〔申し出〕表現を取り上げ、日本語・中国語・英語・韓国語の形式のバリエーションをまとめたうえで、決定権、焦点化、恩恵などの角度から比較考察を行った。

〔申し出〕の表現意図を表しうる表現形式は、《意志表明》、《能力主張》、《許可依頼》、《直接申し出》、《要望質問》、《意志確認質問》、《要求願望質問》という表現タイプに分けられる。

〔申し出〕表現は全体として、聞き手の決定権が強いが、実際使われる表現形式は決定権が自分側にある表現タイプと決定権が相手側にある表現タイプがある。日本語の小説における用例とその中国語・韓国語・英語訳を比べると、中国語では決定権が自分側にある表現タイプを比較的よく使い、英語では決定権が相手側にある表現タイプを比較的よく使うが、日本語と韓国語には大きな差がないという結果を分かった。

〔申し出〕表現の焦点化の観点から、聞き手の状況が焦点化される表現タイプと話し手の行為が焦点化される表現タイプがある。英語では聞き手の状況が焦点化される表現タイプが多く使われ、日本語と韓国語では話し手の行為が焦点化される表現タイプが多く使われるが、中国語では大きな差がないという傾向が見られた。

〔申し出〕は利益が相手にあるので、日本語・中国語・韓国語では自分から相手に恩恵を与えることを表す表現形式が使われる場合がある。中国語と韓国語は行為自体が恩恵を与えることであるかどうかによって、恩恵形式の有り無しを使い分ける傾向があるが、日本語の場合、行為自体より相手との人間関係が優先されるようである。

第6章では、日本語・中国語・韓国語・英語の表現形式がどのような行動展開表現に用いられるかをまとめた上で、表現形式の使用から各言語における行動展開表現の相互関係を検討した。

まず、平叙文・疑問文・命令文の使用については、日本語・韓国語では命令文が〔誘い〕に使われず、英語では平叙文が〔誘い〕に使われないことが分かった。一方、中国語では平叙文・疑問文・命令文それぞれにおいて、〔依頼〕、〔勧め・助言〕、〔誘い〕、〔申し出〕の表現意図をカバーしていることが分かった。

次に、表現タイプごとに詳しく見ていくと、どの言語でも、同一の表現タイプが複数の行動展開表現に用いられる場合があることが分かった。ただし、その共通の表現タイプの分布は言語ごとに違う。全体的に言えば、行動展開表現の形式の汎用性は日本語と韓国語の相似度が高く、中国語と英語の相似度が高い傾向にあると言える。

論文審査の結果の要旨

本稿で取り上げた [依頼]、[勧め・助言]、[誘い]、[申し出] に限って言えば、同一の表現タイプが複数の行動展開表現に用いられるのは、[依頼] と [勧め・助言] の両方、[勧め・助言] と [誘い] の両方、または [誘い] と [申し出] の両方に用いられる場合であった。このような共通の表現タイプはみな「行動者」と「利益」を表すのに幅を持っていることが特徴的である。形式の観点から、[依頼]、[勧め・助言]、[誘い]、[申し出] はこのような共通の表現タイプを使用することで連続性を示している。

氏 名	楊 吟
論 文 題 目	行動展開表現の日本語・中国語・韓国語・英語の対照研究
要 旨	
<p>本論文は、その表現によって相手または自分が何らかの行動を起こしその表現内容が実現することを目的・意図する「行動展開表現」の中から、「依頼」「勧め・助言」「誘い」「申し出」の各表現について、日本語、中国語、韓国語、英語の4言語を対照し、各言語および各表現における相違点と共通点を明らかにすることを目的としたものである。全体は、7章から構成されている。</p> <p>第1章「本研究の立場」では、行動展開表現に関わる先行研究考察を概観した後、本論文の目的と研究方法が示されている。</p> <p>第2章「[依頼]表現の形式」では、まず、4言語の依頼表現の形式のバリエーションの全体像を示した上で、依頼表現の形式と話し手の強制力の関係について検討し、全体に聞き手の決定権が優勢で話し手の強制力は強くないものの、中国語、韓国語では比較的話し手の強制力が強めの形式を多く使い、英語では比較的話し手の強制力が弱めの形式を多く使い、日本語はその中間に位置することが示されている。次に、依頼表現における利益、恩恵について検討し、日本語では特に自らの利益、恩恵を受けることを表す授受表現を含む表現形式が多用されるのに対して、中国語、韓国語、英語では利益・恩恵を受けることを表す表現形式がそれほど多く用いられず、「命令指示」のような利益・恩恵を表さない表現形式でも依頼の表現意図を表し得ることを指摘している。</p> <p>第3章「[勧め・助言]表現の形式」では、4言語の勧め・助言表現の形式のバリエーションの全体像を示した上で、勧め・助言表現における話し手の強制力について検討し、中国語、韓国語、英語では比較的話し手の強制力が強めの形式を多く使い、日本語では比較的話し手の強制力が弱めの形式を多く使うことを明らかにしている。</p> <p>第4章「[誘い]表現の形式」では、誘い表現の形式の全体像を示した上で、「グループ型」の誘いと「引き込み型」の誘いにそれぞれどのような表現形式が使われるかを検討し、同一の形式が両方の型に使われることが多いが、特に韓国語ではその傾向が強く、一方、英語ではそれぞれの型で異なる表現形式を使い分けることが多いことを示している。次に、勧め・助言の表現形式が意志の表現から拡張されたものであるか、勧めの表現から拡張されたものであるかについて検討し、日本語、中国語、韓国語では意志から拡張した形式が多く用いられ、英語では勧めから拡張した形式が比較的多く用いられることを明らかにしている。さらに、典型的な誘い表現とは異なる「習慣的[誘い]」「懇願的[誘い]」「了承的[誘い]」表現が存在すること、他言語に比べて日本語では目上の人を誘う場合には誘いの表現形式が避けられる傾向が強いことを指摘している。</p> <p>第5章「[申し出]表現の形式」では、申し出表現の形式の全体像を示した上で、申し出表現における決定権の問題について検討し、申し出表現では決定権は聞き手にあるとする先行研究に対して、決定権が話し手にある場合もあることを指摘し、中でも中国語では決定権が話し手にある表現形式を比較的多く使い、一方日本語、韓国語、英語では決定権が聞き手にある表現形式が多く使うことを明らかにしている。次に申し出表現において事象連鎖の中でどの場面が焦点化されるかについて検討し、聞き手状況が焦点化される表現タイプと話し手の行為が焦点化されるタイプがあることを指摘し、英語では聞き手状況が焦点化される表現形式を多く使い、日本語、韓国語では話し手の行為が</p>	
主査記載 氏名・印	鈴木 義和

焦点化される表現形式を多く使い、中国語では大きな差がないという傾向があることを明らかにした。さらに、申し出表現における利益、恩恵について検討し、日本語、中国語、韓国語では聞き手に恩恵を与えることを表す形式を使うことがあり、中国語、韓国語では行為自体が恩恵を与えるかどうかによってそのような形式が選択されるのに対して、日本語では行為の性質よりも話し手聞き手の人間関係が優先されることを指摘している。

第6章「行動展開表現の相互関係」では、4言語ごとにそれぞれの表現形式のタイプがどのような表現意図を表し得るかを示した上で、まず、平叙文、疑問文、命令文がどのような表現意図を表すかを検討し、日本語、韓国語では命令文が誘いに使われず、英語では疑問文が誘いに使われないのに対して、中国語では全ての表現意図に3つの文類型が使われることを指摘している。次に、行動展開表現形式の汎用性について検討し、どの言語でも同一の表現形式のタイプが複数の表現意図に用いられるが、そのような汎用性のあり方については、日本語と韓国語に相似性が高く、中国語と英語に相似性が高いことを指摘している。さらに、異なる表現意図にどれだけ同一の表現形式のタイプが用いられているかを検討した結果、および、行為者と受益者の共通性から、依頼と勧め・助言、勧め・助言と誘い、誘いと申し出がそれぞれ連続的であることを明らかにしている。

第7章は「おわりに」では、2～6章での考察をまとめ、今後の課題を示している。

本論文は、「依頼」「勧め・助言」「誘い」「申し出」という多くの表現意図について、4つの言語の対照研究を行うという極めて意欲的で、射程の大きな研究である。これは、論文提出者の傑出した外国語能力とITP（インターナショナルトレーニングプログラム）によって経験し得た韓国、アメリカでの長期留学の成果があつて、はじめてなし得たものであるとすることができる。研究対象の広さ故、全体として考察が表面的で事実の指摘の範囲にとどまっておき、その言語事実のよってきたる根拠を問うまでに至っていないこと、検討に際して用いられた用例の範囲、量がともに十分なものとは言えないことなど、今後に残された課題は多いが、多くの言語を対照し、行動展開表現の中の多くの表現の実態を相当に明らかにし得たことは、大いに評価することができる。

以上のことから、本審査委員会は全員一致で、論文提出者・楊吟が博士（文学）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	鈴木 義和	副査	准教授	高梨 信乃
副査	教授	松本 曜	副査	准教授	石山 裕慈
副査	教授	實平 雅夫			